

沖縄県伊平屋方言の動詞の活用と文法的な形式

當山 奈那（琉球大学）

1. はじめに

§ 調査情報

本報告のデータは、全て伊平屋村島尻出身／在住の話者 2 名、H・N（S33 年生、男性）、H・S（S7 生、男性）への面接調査によるものである。

§ 動詞の一般的な性格づけ

動詞は、(I) 語彙的な意味 (II) 構文論的な機能 (III) 形態論的な形式の性格にしたがって分類される品詞の一つである。語彙的な意味として、動詞は、基本的に、動作、変化、状態のような具体的な、動的な現象をとらえている。この動詞の特性と関連して、動詞は、文の構文論的な構造において主として述語としてはたらいっている。そこで陳述的な機能をはたし、テンスやアスペクトやムードのような形態論的なカテゴリーにしたがって、文法的な形式をさまざまにとりかえる。動詞は人や物の動的な特徴をあらわしながら、述語として機能するために、種々の文法的な形式を担わされているのである。この形態論的な体系は言語によって異なる。

§ 伊平屋方言の動詞の形態論的なカテゴリーと形態論的な形式

沖縄県島尻郡伊平屋方言（以下、伊平屋方言）の動詞がもつ形態論的なカテゴリーには、現代日本語の動詞と同じように、テンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、やりもらいがある。形態論的なカテゴリーは、それを構成する形態論的な形をパラディグマティックな体系に統一する一般化された意味・特徴である。個々の形態論的なカテゴリーには、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるもの、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるもの、語尾のとりかえによってあらわされるものがある。

個々の形態論的な形式は、語幹、語尾、助辞などの形づくりの要素に分化している。語幹は「原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の（活用以外の）特定のカテゴリーに属することを表現するやくわりをもっている要素」であり、語尾は「同一の（活用以外の）カテゴリーに属する個々の活用形を特徴づけるやくわりをもった要素のうち、基本的なもの」である。語尾は文法的な意味に応じで変化する部分で、残りの変化しない部分が語幹である。語幹と語尾の境界には、「-」を挿入する。

おのおのの動詞がどのように語幹を形成し、どのような語尾をともなって活用形を作るかということは、個々の動詞の形づくりにとって重要である。語幹と語尾の形成は、動詞の活用のタイプに分類する上でも重要になる。また、個々の活用形の形づくりをみることによって、個々の活用形の成り立ちをしるうえでも重要である。

§ 終止形と非終止形の体系と伊平屋方言の特徴

動詞は、文のなかの機能にしたがって、大きく終止形 finite form と非終止形 non-finite form とにわかれている。非終止形の動詞は、連体形、連用形、条件形にわかれている、それぞれ独自の体系をもっている。次の表に動詞「のむ」を代表させて一覧を示す（確認できていない形式は空欄にしている）。

【表】動詞「nunun（飲む）」の語形変化

テンス		非過去形	過去形
ムード			
直説法		nun-un（飲む）	nu-nan（飲んだ） / nun-utan
質問法	肯否質問	nun-umi（飲むか）	nu-ni:（飲んだか） / nun-uti num-i:（飲んだか）
	疑問詞質問	nun-o:	nun-a:（飲んだか）
命令法		num-e:（飲め）	
勧誘法		num-ani（飲もう） nuno:（飲もう）	
連体形		nun-unu（飲む）、nun-un	nu-nanu/nun-utanu
連用形	中止形	num-i（飲み）、nun-e:（飲んで）	
	同時形		
条件形	原因形	nun-utu（飲むから）	nu-natu（飲んだから）
	契機形	nu:no:（飲むと）	
	前提形		
	譲歩形	nunen（飲んででも）	
	逆接形	nunufiga（飲むが）	nunafiga、nunutafiga
	目的形	numinga（飲むに）	

終止形は、いいおわりの述語になって文の陳述のセンターとしてはたらくことから、テンス、ムードを表示する形式として文法的な形を発達させている。

【表】伊平屋方言の終止形の体系

ムード				テンス	アスペクト	
					完成	継続
叙述	事実確認	断定	記述	非過去	nun-un	nun-e: atʃun nun-o:N
				過去	nu-nan	nun-e: atʃu:tan nun-o:tan
				目撃過去	nun-utaN	
	事実未確認	非断定	判断 推量	非過去	nununu hadʒi	nun-o:N hadʒi nun-e: attsun hadʒi
				過去	nun-an hadʒi	
			判断 不可 疑い	非過去	numura nunugaja:	
過去	nunaga nunagaja:					
実行	勧誘			—	num-ani、nuno:	nun-o:kapi
	命令			—	num-e:	nun-o:kanahe:
	禁止			—	num-una	num-anʒi
質問	肯否質問			非過去	nun-umi	nun-o:ka nun-e: attsu:ka:
				過去	nun-i:、num-i:	
	疑問詞質問			非過去	nun-o:	nun-o:jo:
				過去	nun-a:	

連体形は、連体的な従属節の述語になって名詞をかざる形である。連体形も非過去形と過去形の対立があり、終止形と同様に過去に2系列（第一過去形と第二過去形）があるが、連体形のあらかず時間は、いいおわりの述語があらかず時間を基準にする相対的なテンスである。

連用形は、ふたつの出来事をならべ、その時間的な関係を表現するならばあわせ文やふたまた述語文のつきそい文（従属文）の述語になる。第一中止形は、形式上、現代日本語の第一中止形に対応し、単語づくりや形づくりの要素になる。伊平屋方言の場合、単独では述語になることはない。第二中止形は、現代日本語の第二中止形に対応し、第一中止形に接辞「テ」が接続している。他の沖縄島諸方言の場合、あわせ文の述語として使用されてふたつの動作の間の同時の関係や先行後続の関係をあらわしたり、補助動詞をともなって文法的な形式を作る要素となることもできるが、伊平屋方言は第二中止形をもたない。時折、調査中に観察される第二中止形は周辺の方言や首里那覇方言のような権威的な方言との接触による影響とみなしている。

第三中止形は第一中止形にアリ（有り）が接続していて¹、他の沖縄島内の諸方言では

¹ *huri ari > *hurjari > *hujai > huje:（降って）

「第三中止形は、首里方言でヌマーニ、あるいはヌマーイであらわれ、『沖縄語辞典』（国立国

先行後続の時間的な関係をあらわすあわせ文の述語でしか使用されないが、伊平屋方言や宮古島方言、石垣島方言では、単語づくり、形づくりの要素にもなる。

【表】標準語の第二中止形に対応する伊平屋と首里の対応（『名護市史言語編』：275）

	田名	我喜屋	島尻	野甫	首里
落ちて	utie:	utie:	utie:	utie:	utiti
買って	ko:e	ko:e	ko:e:	ko:e:	ko:ti
笑って	ware:	warae	ware:	warae:	warati
降っている	hujo:n	hujo:n	hujon	hujo:n	huto: n

条件形は、条件づけを表現するあわせ文の従属文の述語になる。

伊平屋方言の動詞の活用形の特徴としては、(1)完成相の直説法の終止形、質問法の非過去形のように、第一中止形に存在動詞 un（居る）が補助動詞としてくみあわせり、音声的に融合したタイプ、(2)否定形や命令形や勧誘形などのような、un の融合しないタイプ、(3)第三中止形や、継続相のように存在動詞 ari（あり）が融合しているタイプが同居している点が大きな特徴であるといえよう。さらに、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるものや、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるものがあり、動詞の形態論的な形式は複雑な活用の体系をなしている。

2 伊平屋方言の動詞の形づくりの要素

伊平屋方言を含む多くの琉球語の動詞には、形態論的カテゴリーとして、テンス、モード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、ヴォイス、もくろみ、やりもらい、それらを構成する文法的な対立のしかた、文法的な形を構成する語幹（あるいは語根）は、現代日本語の動詞と共有のものを有し、音韻的にも対応している。語尾や助辞も、現代日本語と対応し、よく似た構造をもつものが少なくない。一方で、琉球語に固有の語尾や助辞、接尾辞もあって、琉球語独自の形態論的な体系を有している。

o>u、e>i の狭母音化、それに伴う子音の変化、前後する音声の同化による子音の変化などの音韻変化があり、その音韻変化は動詞の語幹、および語尾の音声形式にも及んでいて、伊平屋方言の動詞の形づくりを複雑なものにしている。

伊平屋方言の動詞の語幹には、基本語幹、音便語幹、連用語幹、融合語幹の四つの変種（ヴァリエント）が存在する。この変種の名称は、上村幸雄（1963）による。語幹と語尾の作り方から、伊平屋方言の動詞は規則変化動詞と特殊変化動詞に分けることができる。規則変化動詞は、さらに、強変化動詞と混合変化動詞に分けられる。強変化動詞は、基本語幹と連用語幹の末尾に子音があらわれ、音便語幹をもつ動詞である。音便語幹には、促

語研究所)によると、ヌマーイの方がより古い言い方のようなのである。1531年に第一巻が編纂された古歌謡集『おもろさうし』にも「～やり」の形でみられる。(巻4-176「とよむ 大きみやもゝしま そろへやり みおやせ。」(訳:名高い大君は百島を揃えて差し上げよ。)) (巻11-632「いと ぬきやり、なわ ぬきやり、」(訳:糸を貫いて、縄を貫いて)) (『名護市史言語編』: 89)

音便語幹、語幹末子音が脱落した脱落音便語幹のふたつの変種がある。

混合変化動詞は、基本語幹末に子音があらわれ、連用語幹末と音便語幹末に母音があらわれる、子音語幹と母音語幹の混合した動詞である。

基本語幹は、命令形、勧誘形、同時形、条件形にあらわれる。連用語幹は、直説法と質問法の非過去形、連体形の非過去形の活用形にあらわれる語幹で、歴史的には、語基に人の存在をあらわす *un* (居る) が文法化して融合した語形にあらわれるものである。融合語幹は、連用形に物の存在をあらわす *ari* (有り) が融合する過程で生じた語幹である。第三中止形や継続相の形式がここに分類される。音便語幹は、直説法と質問法の過去形、譲歩形にあらわれる。

2. 1 基本語幹

基本語幹を構成要素にもつ活用形は、その動詞本来の形を保存している場合があって、当該動詞のなりたちを知る上で重要である。連用語幹も音便語幹も基本語幹から派生していて、基本語幹からそのなりたちを説明することができるという点でも基本的である。また、基本語幹は、使役動詞などの文法的な派生形式をつくる語基になるという点でも当該動詞の基本的な形式である。

伊平屋方言	日本語
強変化	強変化
I m num-AN (飲まない)	N1m nom-anai
kam-AN (食べない)	kam-anai
?am-AN (編まない)	am-anai
I b tub-AN (飛ばない)	N1b tob-anai
I k kak-AN (書かない)	N1k kak-anai
I g φu:g-AN (漕がない)	N1g kog-anai
I g ?e:g-AN (泳がない)	N1g ojog-anai
I h ?ndzah-AN (出さない)	N1s das-anai
I r1 ?ur-AN (売らない)	N1r ur-anai
I r1 tur-AN (取らない)	tor-anai
I r2 ?are:r-AN (洗わない)	N1w araw-anai
I r3 ko:r-AN (買わない)	kaw-anai
I r3 i:r-AN (酔わない)	jow-anai
混合変化	弱変化
II e1 ?akir-AN (開けない)	N2e ake-nai
fittir-AN (捨てない)	ne-nai
i:r-AN (もらわない)	je-nai
?irir-AN (入れない)	ire-nai
II e2 ?ukir-AN (起きない)	N2i oki-nai
?urir-AN (降りない)	ori-nai
?u(t)tir-AN (落ちない)	oci-nai

II i	tʃi:r-aN (着ない)	ki-nai
	特殊変化	特殊変化
III 1	h-aN~s-aN (しない)	si-nai
III 2	φuN (来ない)	konai

強変化動詞の場合、語幹末の子音は伊平屋方言と日本語とでよく対応している。Im、Ib、Ik、Ig などである。

日本語の強変化動詞の語幹末が母音になる動詞 (N1w) に対応する伊平屋方言の強変化動詞 (Ir2、Ir3) の語幹末に r があらわれる。同様に、現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の動詞の基本語幹末も r になる。伊平屋方言で語幹末子音が r であらわれる現象を、かりまた (2010) にならい、「r 語幹化」とよぶ。

古代日本語の f 語幹動詞 (基本語幹末子音が f の動詞で、現代日本語の N1w の動詞) に対応する伊平屋方言の動詞 (Ir2、Ir3) は、基本語幹末にも r があらわれ、r 語幹化する。

2. 2 連用語幹

強変化動詞の第一中止形は、基本語幹に語尾-i のついたものだが、語幹末の子音が語尾 i の逆行同化によって音韻変化し、第一中止形の語幹が基本語幹と異なる形になった。この語幹の変種が連用語幹である。直説法非過去形、質問法の非過去形、第二過去形などは、第一中止形をもとにして派生した活用形だが、語幹 (あるいは語基) と語尾や接辞、補助的な単語などとのむすびつき方のつよさの度合いによって語幹と語尾が融合し、相互に影響して変化した結果、語幹に変種を生じさせたものがある。また、特定の活用にかぎってこれらの変化をこうむらなかったものがある。

特に、伊平屋方言では、直説法非過去形は基本的に連用語幹を用いて作られるが、強変化動詞の m 語幹末動詞、b 語幹末動詞の場合、連用形に-ari を融合させた第三中止形の語幹である融合語幹と同じ語幹になっている点に留意されたい。この m、b 両語幹末動詞の融合語幹化が起こるかどうかは、伊平屋島内でも集落によって異なるようである²。

	融合語幹	連用語幹	
強変化	第三中止形	第一中止形	直説法非過去
Im	nun-e: (飲んで)	num-i (飲み)	nun-UN (飲む)
Ib	tun-e: (飛んで)	tub-i (飛び)	tun-UN (飛ぶ)
Ik	?attf-e: (歩いて)	?atf-i (歩き)	?atf-UN (歩く)
	mutf-e: (もって)	mutf-i (もち)	muts-UN (もつ)
Ig	φu:ɕ-e: (漕いで)	φu:ɕ-i (漕ぎ)	φu:ɕ-UN (漕ぐ)
Ih	?ndzah-e: (出して)	?ndzah-i (出し)	?ndzaφ-UN (出す)
Ir1	?u:-e: (売って)	?u-i (売り)	?u-N (売る)

² 例えば、田名方言の場合、「num-UN (飲む)」「tub-UN (飛ぶ)」のように、b 語幹末動詞も m 語幹末動詞も直説法非過去形式は連用語幹であらわれている。(崎山・上門 2017 より)

Ir2	ʔara-e: (洗って)	ʔara-i (洗い)	ʔara-N (洗う)
	ko:-e: (買って)	ko:-i (買い)	ko:-N (買う)
混合変化			
II e1	ʔaki-e: (開けて)	ʔaki: (開け)	ʔaki-N (開ける)
	ʃitti-e: (捨てて)	ʃiti: (捨て)	ʃiti-N (捨てる)
II e2	ʔuki-e: (起きて)	ʔuki: (起き)	ʔuki-N (起きる)
	ʔuri-e: (降りて)	ʔuri: (降り)	ʔuri-N (降りる)
II i	tʃi:-e: (着て)	tʃi: (着)	tʃi-N (着る)
特殊変化動詞			
III 1	h-e: (して)	hi: (し)	ϕu-N (する)
III 2	ʃe: (きて)	ʃi: (来)	ʃuN (来る)

また、基本語幹末の子音が r になる動詞 (I r1) の連用語幹は、語幹末が母音になっていて、基本語幹とことなる形になっている。これは、語尾 i の影響をうけた口蓋音化によって語幹末の子音 r が脱落したために生じたものである。

Ir1 ur-i > ʔuri > ʔu-i (売り)

伊平屋方言の混合変化動詞の第一中止形語幹末には、長母音があらわれ、r 語幹化している基本語幹とは異なっている。この変種も連用語幹である。古代日本語では混合変化動詞の基本語幹 (連用語幹も) は、語幹末が i になる動詞と e になる動詞の 2 タイプがあるが、伊平屋方言のばあい、いずれも e になるタイプにさかのぼる³。

最後に、融合語幹から作られる継続相非過去の形をあげておく。強変化動詞では、基本的に、語幹に語尾-o:N を後接させて作る。r 語幹末の動詞と、混合変化動詞では、-jo:N を後接させて作る。

	融合語幹		連用語幹
強変化	第三中止形	継続相非過去	直説法非過去
Im	nun-e: (飲んで)	nun-o:N (飲んでいる)	nun-un (飲む)
Ib	tun-e: (飛んで)	tun-o:N (飛んでいる)	tun-un (飛ぶ)
Ik	mutʃ-e: (持って)	mutʃ-o:N (持っている)	muts-un (持つ)
Ik	ʔattʃ-e: (歩いて)	ʔattʃ-o:N (歩いている)	ʔattʃ-un (歩く)
Ig	ϕu:ɕ-e: (漕いで)	ϕu:ɕ-o:N (漕いでいる)	ϕu:ɕ-un (漕ぐ)
Ih	ʔndzah-e: (出して)	ʔndzah-o:N (出している)	ʔndzaϕ-un (出す)
Ir1	ʔu:-e: (売って)	ʔu-jo:N (売っている)	ʔu-N (売る)
Ir2	ʔara-e: (洗って)	ʔara-jo:N (洗っている)	ʔara-N (洗う)
	ko:-e: (買って)	ko:jo:N (買っている)	ko:-N (買う)
混合変化			
II e1	ʔaki-e: (開けて)	ʔaki-jo:N (開けている)	ʔaki-N (開ける)

³ 「降る」「満つ」のような上二段型の混合変化も、「降れる」「満てる」のような下二段型と対応していると考えられる。沖縄島内の方言全体で、下二段型、上二段型に対応する動詞は、破擦音化や口蓋音化がおこっていない。 *ote=te > uti-ti

	fitti-e: (捨てて)	fiti-jo:N (捨てている)	fiti-N (捨てる)
Ⅱ e2	?uki-e: (起きて)	?uki-jo:N (起きている)	?uki-N (起きる)
	?uri-e: (降りて)	?uri-jo:N (降りている)	?uri-N (降りる)
Ⅱ i	tʃi:-e: (着て)	tʃi:-jo:N (着ている)	tʃi-N (着る)
特殊変化動詞			
Ⅲ 1	h-e: (して)	ho(:)N (している)	φu-N (する)
Ⅲ 2	ʃe: (きて)	ʃo:N (来ている)	ʃuN (来る)

2. 3 音便語幹

伊平屋方言の過去形には、音便化の現象がみられる。音便語幹のタイプには、語幹が母音で終わるタイプと促音で終わるタイプと、標準語と同様に音便がないタイプとがある。

① 母音語幹

I m 動詞と I b 動詞の過去形の語尾は-nan である。音便語幹の末尾子音が脱落した脱落音便がみられる。また、「sukun-un (死ぬ)」もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、撥音便であらわれるもの)

nu-nan (飲んだ)、ka-nan (食べた)、ju-nan (読んだ)、ku-nan (汲んだ)、?a-nan (編んだ)、tu-nan (飛んだ)、?asi-nan (遊んだ)、ju-nan (呼んだ)、?ira-nan (選んだ)、suku-nan (死んだ)

I k 動詞と I h 動詞、I g 動詞の過去形の語尾は-tʃan である。I k 動詞動詞のうち、標準語の t 語幹動詞に所属する一部の動詞がこのタイプに含まれる。「見る」「沈む」「縊る」もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、イ音便、促音便、撥音便になるものの一部)

?a-tʃan (開いた)、?at-tʃan (歩いた)、ka-tʃan (書いた)、tat-tʃan (出した)、?ndʒa-tʃan (出した) no:-tʃan (直した)、mu-tʃan (もった) in-tʃan (見た)、ʃin-tʃan (沈んだ)、kun-tʃan (縊った)

強変化動詞のうち、基本語幹の語幹末が r になる動詞は、過去形の語尾が-tan である。存在動詞もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、促音便になるもの)

?u:-tan (売った)、tu-tan (取った)、wa-tan (降った)、na-tan (なった)、ke:-tan (帰った)、φu-tan (掘った)、φu-tan (降った)、habu-tan (かぶった)、?ara-tan (洗った)、ko:-tan (買った)、mo:-tan (舞った)、tʃi:-tan (切った)

I g 動詞の過去形の語尾は-dʒan (dʒan) である。また、「ndʒ-un、?indʒ-un (行く)」もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、促音便とイ音便に対応するものの一部)

n-dʒan (行った)、φu:-dʒan (漕いだ)、?e:-dʒan (泳いだ)、?in-dʒan (行った)

② 促音語幹

促音便語幹になる動詞は、標準語の t 語幹動詞に所属する「立つ」と不規則活用動詞の「座る」である。第三中止形の語幹末が促音になる。語尾は ci である。

tat-ʃan (立った)、ʔit-ʃan (座った)

③ 音便なし

現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の混合変化動詞の過去形も語幹尾が母音でおわるが、現代日本語のばあいと同様に音便現象がおきていないと考える。

ʔaki-tan (開けた)、ʃitti-tan (濡れた)、kwi-tan (くれた)、ʔiri-tan (入れた)、u-tan (いた)、ʔa-tan (あった)

2. 4 強変化動詞

強変化動詞は、下位タイプの分化がはげしく、どの動詞がどんな活用形をつくるのか、規則を見つけるのが難しい。活用形を導き出す規則は基本語幹末子音によって決まってくるが、動詞語幹の音環境によって容易にやぶられる。

(1) m 語幹動詞

m 語幹動詞には、nun-un (飲む)、kan-un (食べる)、ʔan-un (編む)、kun-un (汲む) などがある。基本語幹の末尾子音は -m になり、連用語幹と融合語幹の末尾子音は -n になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は n である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
num-an (飲まない)	nun-un	nun-e:	nu-nan
kam-an (食べない)	kan-un	kan-e:	ka-nan
ʔam-an (編まない)	ʔan-un	ʔan-e:	ʔa-nan
kum-an (汲まない)	kun-un	kun-e:	ku-nan

対応は不明であるが、「死ぬ」を意味する次の動詞も m 語幹動詞と同じ活用をする。

否定形	非過去形	第三中止形	過去形
sukum-an (死なない)	sukun-un	sukun-e:	suku-nan

(2) b 語幹動詞

b 語幹動詞には、tunun (飛ぶ)、ʔaʃin-un (遊ぶ) などがある。基本語幹の末尾子音は -b になり、連用語幹、融合語幹は -n になる。音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は n である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
tub-an (飛ばない)	tun-un	tun-e:	tu-nan
ʔaʃib-an (遊ばない)	ʔaʃin-un	ʔaʃin-e:	aʃi-nan

(3) g 語幹動詞

g 語幹動詞には、 $\phi u:dz-un$ (漕ぐ)、 $?e:dz-un$ (泳ぐ) などがある。基本語幹の末尾が -g、連用語幹、融合語幹の末尾子音は -dz ($dʒ$) になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は -dz ($dʒ$) である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
$\phi u:g-an$ (漕がない)	$\phi u:dz-un$	$\phi u:dz-e:$	$\phi u:-dzan$
$?e:g-an$ (泳がない)	$?e:dz-un$	$?e:dʒ-e:$	$?e:-dzan$

また、「 $?indʒ-un$ (行く)」もこのタイプの活用になる。

$?ing-an$ (行かない)	$?indʒ-un$	$?in-dʒan$
------------------	------------	------------

(4) k 語幹動詞

k 語幹動詞には、 $?atʃ-un$ (歩く)、 $kaʃ-un$ (書く)、 $muts-un$ (持つ) などがある。基本語幹末が -k、連用語幹末が -ʃ ($tʃ$)、音便語幹末が母音あるいは促音で、語尾頭子音が -ʃ である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
$?akk-an$ (歩かない)	$?atʃ-un$	$?atʃ-e:$	$?at-ʃan$
$kak-an$ (書かない)	$kaʃ-un$	$kaʃ-e:$	$ka-tʃan$
$?ak-an$ (開かない)	$?aʃ-un$	$?aʃ-e:$	$?a-ʃan$

また、 $muts-un$ (持つ)、 $tats-un$ (立つ) のような標準語の t 語幹末動詞に対応する伊平屋動詞もこのタイプの活用になる。命令形も $takke:$ (立て) のようになる。現在のところ、t 語幹動詞は確認できていない。

$muk-an$ (持たない)	$muts-un$	$mutʃ-e:$	$mu-tʃan$
$takk-an$ (立たない)	$tats-un$	$taʃ-e:$	$tat-ʃan$

また、次の動詞もこの活用のタイプに含めてよいだろう。ただし、 $ndʒ-un$ (行く) は、基本語幹末子音が -k である点で、k 語幹動詞とみなせるが、連用、融合、音便語幹末の子音は異なる。過去形の語尾が -dzan になっている。k 語幹動詞に、他の活用語幹のタイプが補充法の手続きによって混ざったと考えられる。

$ink-an$ (見ない)	$intʃ-un$	$intʃ-e:$	$in-tʃan$
$ʃink-an$ (沈まない)	$ʃints-un$	$ʃintʃ-e:$	$ʃin-tʃan$
$kunk-an$ (くびらない)	$kunts-un$	$kuntʃ-e:$	$kun-tʃan$
$?ik-an$ (行かない)	$ndʒ-un$	$n:dz-e:$	$n-dʒan$

(5) h 語幹動詞

h 語幹動詞は、基本語幹、連用語幹、融合語幹が -h (ϕ) であらわれる。音便語幹は母音でおわり、語尾頭子音が -ʃ である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
ʔndzah-aN (出さない)	ʔndzɑɸ-uN	ʔndzah-e:	ʔndzɑ-tʃaN
no:h-aN (直さない)	no:ɸ-uN	no:h-e:	no:-tʃaN
turuh-aN (とらさない)	turuɸ-uN	turuh-e:	turu-tʃaN
ʔutuh-aN (落とさない)	ʔutuɸ-uN	ʔutuh-e:	ʔutu-tʃaN

(6) r 語幹動詞

r 語幹動詞は、3つのタイプにわけた。ひとつは、古代日本語との比較から、「取る」「売る」などの r 語幹動詞に対応するタイプである。ふたつめは、w 語幹動詞に属するものである。基本語幹末子音は r で、連用語幹末、融合語幹末は母音になっている。音便語幹も母音でおわっていて、語尾は -tan になっている。

	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
強変化	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
Ir1	ʔu:r-aN (売らない)	ʔu-N	ʔu:-e:	ʔu:-tan
	tur-aN (取らない)	tu-N	tu-e:	tu-tan
	war-aN (割らない)	wa-N	wa-e:	wa-tan
	nar-aN (ならない)	na-N	na-e:	na-tan
	ke:r-aN (帰らない)	ke:-N	ke:-e:	ke:-tan
	ɸur-aN (降らない)	ɸu-N	ɸu-e:	ɸu-tan
	ɸur-aN (掘らない)	ɸu-N	ɸu:-e:	ɸu-tan
Ir2	habur-aN (かぶらない)	habu-N	habu-e:	habu-tan
	tʃir-aN (切らない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-tan
	ʔarar-aN (洗わない)	ʔara-N	ʔara-e:	ʔara-tan
	ko:r-aN (買わない)	ko:-N	ko:-e:	ko:-tan
	mo:r-aN (舞わない)	mo:-N	mo:-e:	mo:-tan
	i:r-aN (酔わない)	i:-N	i:-e:	i:-tan

2. 5 混合変化動詞

混合変化動詞は、連用語幹も音便語幹も同じ形で末尾に母音があらわれる。基本語幹末に子音があらわれる。母音語幹と子音語幹の混合したタイプである。伊平屋方言の場合、基本語幹が強変化動詞化することによって混合変化動詞に移行したものが分類される。

混合変化	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
II e1	ʔakir-aN (開けない)	ʔaki-N	ʔaki-e:	ʔaki-tan
	ʃittir-aN (捨てない)	ʃiti-N	ʃitti-e:	ʃitti-tan
	ki:r-aN (くれない)	kwi:-N	kwi-e:	kwi-tan
	ʔirir-aN (入れない)	ʔiri:-N	ʔiri-e:	ʔiri-tan
	i:r-aN (もらわない)	i:-N	i:-e:	i:-tan

	fittar-aN (濡れない)	fitta-N	fitta-e:	fitta-taN
	?indar-aN (濡れない)	?inda-N	?inda-e:	?inda-taN
	nu:r-aN (寝ない)	nu-N	nu:-e:	nu:-taN
	ku:r-aN (閉めない)	ku-N	ku:-e:	ku:-taN
	me:r-aN (燃えない)	me-N	me:-e:	me:-taN
	ke:r-aN (蹴らない)	ke-N	ke:-e:	ke:-taN
II e2	?ukir-aN (起きない)	?uki-N	?uki-e:	?uki-taN
	?urir-aN (降りない)	?uri-N	?uri-e:	?uri-taN
	?u(t)tir-aN (落ちない)	?u(t)ti-N	?utti-e:	?uti-taN
II i	tʃi:r-aN (着ない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-taN

2. 6 特殊変化動詞

	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
	h-aN ~ s-aN (しない)	ɸu-N	h-e:	ʃitʃaN
	ɸuN (来ない)	ʃuN	ʃe:	(t)ʃaN
	ma:N (みない)	nun	ne:	na:N
	kw-aN (食わない)	kwe-N	kwa:-e:	kwa:-taN
	?jaN (言わない)	?ju:N	?je:	?ju:taN
	j-aN (座らない)	ju-N	j-e:	?it-ʃaN
		neN		neN-taN
	ur-aN (いない)	u-N	u-e:	u-taN
	(?ar-aN)	?a-N	?a-e:	?a-taN

【資料】動詞活用一覧

	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
強変化	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
Im1	num-aN (飲まない)	nun-un	nun-e:	nu-naN
	kam-aN (食べない)	kan-un	kan-e:	ka-naN
	?am-aN (編まない)	?an-un	?an-e:	?a-naN
	kum-aN (汲まない)	kun-un	kun-e:	ku-naN
Im2	sukum-aN (死なない)	sukun-un	sukun-e:	suku-naN
Ib	tub-aN (飛ばない)	tun-un	tun-e:	tu-naN
	?aʃib-aN (遊ばない)	?aʃin-un	?aʃin-e:	aʃi-naN
Ik1	?akk-aN (歩かない)	?atʃ-un	?attʃ-e:	?at-ʃaN
	kak-aN (書かない)	kaʃ-un	kaʃ-e:	ka-tʃaN
	?ak-aN (開かない)	?aʃ-un	?aʃ-e:	?a-ʃaN
Ik2	muk-aN (持たない)	muts-un	mutʃ-e:	mu-tʃaN
	takk-aN (立たない)	tats-un	taʃ-e:	tat-ʃaN
Ik3	ink-aN (見ない)	intʃ-un	intʃ-e:	in-tʃaN
	ʃink-aN (沈まない)	ʃints-un	ʃintʃ-e:	ʃin-tʃaN

Ik4	kunk-aN (くびらない)	kunts-un	kuntʃ-e:	kun-tʃaŋ
Ik5	ʔik-aN (行かない)	ŋdʒ-un	ŋ:dʒ-e:	ŋ-dʒaŋ
Ig1	ʔu:g-aN (漕がない)	ʔu:dʒ-un	ʔu:dʒ-e:	ʔu:-dʒaŋ
	ʔe:g-aN (泳がない)	ʔe:dʒ-un	ʔe:dʒ-e:	ʔe:-dʒaŋ
Ig2	ʔiŋg-aN (行かない)	ʔiŋdʒ-un		ʔiŋ-dʒaŋ
Ih	ʔŋdzah-aN (出さない)	ʔŋdzəʔ-un	ʔŋdzah-e:	ʔŋdzə-tʃaŋ
	no:h-aN (直さない)	no:ʔ-un	no:h-e:	no:-tʃaŋ
	turuh-aN (とらさない)	turuʔ-un	turuh-e:	turu-tʃaŋ
	ʔutuh-aN (落とさない)	ʔutuʔ-un	ʔutuh-e:	ʔutu-tʃaŋ
Ir1	ʔu:r-aN (売らない)	ʔu-N	ʔu:-e:	ʔu:-taŋ
	tur-aN (取らない)	tu-N	tu-e:	tu-taŋ
	war-aN (割らない)	wa-N	wa-e:	wa-taŋ
	nar-aN (ならない)	na-N	na-e:	na-taŋ
	ke:r-aN (帰らない)	ke:-N	ke:-e:	ke:-taŋ
	ʔur-aN (降らない)	ʔu-N	ʔu-e:	ʔu-taŋ
	ʔur-aN (掘らない)	ʔu-N	ʔu:-e:	ʔu-taŋ
	habur-aN (かぶらない)	habu-N	habu-e:	habu-taŋ
Ir2	tʃir-aN (切らない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-taŋ
	ʔarar-aN (洗わない)	ʔara-N	ʔara-e:	ʔara-taŋ
	ko:r-aN (買わない)	ko:-N	ko:-e:	ko:-taŋ
	mo:r-aN (舞わない)	mo:-N	mo:-e	mo:-taŋ
	i:r-aN (酔わない)	i:-N	i:-e:	i:-taŋ
混合変化	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
II e1	ʔakir-aN (開けない)	ʔaki-N	ʔaki-e:	ʔaki-taŋ
	ʃittir-aN (捨てない)	ʃiti-N	ʃitti-e:	ʃitti-taŋ
	ki:r-aN (くれない)	kwi:-N	kwi-e:	kwi-taŋ
	ʔirir-aN (入れない)	ʔiri:-N	ʔiri-e:	ʔiri-taŋ
	i:r-aN (もらわない)	i:-N	i:-e:	i:-taŋ
	ʃittar-aN (濡れない)	ʃitta-N	ʃitta-e:	ʃitta-taŋ
	ʔindar-aN (濡れない)	ʔinda-N	ʔinda-e:	ʔinda-taŋ
	nu:r-aN (寝ない)	nu-N	nu:-e:	nu:-taŋ
	ku:r-aN (閉めない)	ku-N	ku:-e:	ku:-taŋ
	me:r-aN (燃えない)	me-N	me:-e:	me:-taŋ
II e2	ke:r-aN (蹴らない)	ke-N	ke:-e:	ke:-taŋ
	ʔukir-aN (起きない)	ʔuki-N	ʔuki-e:	ʔuki-taŋ
	ʔurir-aN (降りない)	ʔuri-N	ʔuri-e:	ʔuri-taŋ
II i	ʔu(t)tir-aN (落ちない)	ʔu(t)ti-N	ʔutti-e:	ʔuti-taŋ
	tʃi:r-aN (着ない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-taŋ

特殊変化	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
	h-aN~s-aN (しない)	ɸu-N	h-e:	ʃitʃaN
	ɸuN (来ない)	ʃuN	ʃe:	(t)ʃaN
	ma:N (みない)	nun	ne:	na:N
	kw-aN (食わない)	kwe-N	kwa:-e:	kwa:-tan
	ʔjaN (言わない)	ʔju:N	ʔje:	ʔju:tan
	j-aN (座らない)	ju-N	j-e:	ʔit-ʃaN
		neN	ne:na ⁴	nen-tan
	ur-aN (いない)	u-N	u-e:	u-tan
	(ʔar-aN)	ʔa-N	ʔa-e:	ʔa-tan

3 文法論的なカテゴリーと文法的な形式

羅列的な記述になってしまうが、これまでに得られた用例を用いて可能な限り文法論的なカテゴリーに基づいて文法的な形式をまとめてみることにする。形態論的な形式を中心にまとめるが、整理ができておらず、語彙的な形式までふくみこんでしまっているところもある。なお、3. 1の一部には、當山(2017)の内容が含まれている。

3. 1 アスペクト・テンス

伊平屋方言のアスペクト・テンス形式には、スル、シタ、シオル、シオッタ、シアリオル、シアリオッタ相当形式が存在する。

表に、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞のアスペクトによる動詞の分類に従って、それぞれの動詞のタイプによってどのような形式が存在しているか／存在していないかをまとめた。各タイプは、「開ける(主体動作客体変化動詞)」、「開く(主体変化動詞)」、「飲む(主体動作動詞)」、「ある、いる(存在動詞)」を代表させて動詞の語形を整理する。

⁴第三中止形の否定は、形式上は存在していないと思われる。

【表】 動詞の分類とアスペクト・テンス形式の分布

	主動客変 (開ける)	主体変化 (開く)	主体動作 (飲む)	存在動詞 (いる)	存在動詞 (ある)
スル				u-N (いる)	?a-N (ある)
シタ	?aki-tan (開けた)	?a-ʃan (開いた)	nu-nan (飲んだ)	u-tan (いた)	?a-tan (あった)
シオル	?aki-N (開ける)	?aʃ-un (開く)	nun-un (飲む)		
シオッタ	?aki-tan (開けた)	?aʃ-utan (開いた)	nun-utan (飲んだ)	ui-tan ⁵ (いた)	?ai-tan (あった)
シアリオル	?aki-jon (開けている)	?aʃ-o:N (開いている)	nun-o:N (飲んでいる)		
シアリオッタ	?aki-jo:-tan (開けていた)	?aʃ-o:-tan (開いていた)	nun-o:-tan (飲んでいた)		

シオッタ相当形式は、連用語幹に -tan、-utan を後接させて作る。シアリオル相当形式は、融合語幹に -jon、-o:N を後接させて作る。シアリオッタ相当形式は、融合語幹に -jo:-tan、-o:-tan を後接させて作る（スル、シタ、シオル相当形式の単語づくりについては、2節を参照されたい）。

伊平屋方言は、完成相と継続相の二項対立型のアスペクト体系をもつ。これは、首里方言と共通しているが、首里方言の継続相がシテ中止形に存在動詞を接続させて作られるのに対して、伊平屋方言の継続相はシアリ中止形に存在動詞を接続させている。

【表】 島尻方言のアスペクト・テンス体系

アスペクト	完成相	継続相
テンス		
非過去	?aki-N (開ける)	?aki-jon (開けている)
過去	?aki-tan (開けた)	?aki-jo:-tan (開けていた)

動詞の完成相非過去の形式は、基本的に、〈はじめ〉から〈なか〉をへて、〈おわり〉にいたるまでのひとまとまりの動作を表す。しかし、変化の進行や動作の進行、すなわち、限界に到達していない動作や状態をあらわすこともできる。はじめの2例が限界に到達したひとまとまりの動作をあらわしていて、後の3例が変化の進行、あるいは動作の進行をあらわしている。この進行の意味は、この形式がシオル相当形式であり、もともと進行を

⁵ 形式上は、「un (居る)」の第一中止形にさらに un がくっついて融合した形式 uin の過去形である。そのため、シオッタ相当形式とした。現在までに utan (シタ形式) との違いは確認できていない。

表す形式であったことと関連している。

- (1) taro:ga afa: rokudzine jarkufi aki:N.
太郎が 明日 六時に 戸を 開ける。
- (2) unu miseja me:nafi jikama: kudzine afo:jiga afa:ja dzu:dzine: afun.
その 店は 毎日 朝 9時に 開いているが、 明日は 10時に 開く。
- (3) une une makuga afundo:.
ほら ほら、幕が 開きつつあるよ。
- (4) ntfendi ifiga jifanu ka:rake: uttin.
みて！ 岩が 下の 川に 落ちつつある。[岩が崖から落ちてくるのをみて]
- (5) ai, amiru funmahe:.
おや、雨が 降っているじゃないか。[窓を開けて]

また、伊平屋方言では、シアリ中止形と動詞 attsun（歩く）の分析的な形式が進行をあらわす意味として文法的に発達している。ここでの補助動詞 attsun（歩く）は、主体の制限から解放され、語彙的な意味を失っている（意味の喪失（semantic bleaching））。また、動作進行という新たな文法的意味を獲得しており、次の例のように音韻縮約が起こっている。また、変化の主体が無情物であっても、変化の進行を表現するためにこの形式を用いることができる。

- (6) jarkufi akie: attsun/akja:tsun.
戸を 開けている。[今何をしているのかと質問されて]
- (7) ifiga uttie attsun.
岩が 落ちているよ。[崖が高くて、岩が地面に落ちている途中なのをみて]

このシアリアルキオルに相当する形式（あるいは、テンス的に対立するシアリアルキオッタ相当形式）は、〈反復習慣〉をあらわすことができる。したがって、継続相であるシアリアル相当形式と表現領域の重なりが大きい。特に、主体動作動詞のような非内的限界動詞の場合、競合している。ただし、シアリアルキオル相当形式は、動作や状態の終了限界達成後を表すことはできず、そのため、主体動作客体変化動詞のような内的限界動詞の場合、〈主体結果〉〈客体結果〉まであらわすことはできないようである。この時はシアリアル相当形式が用いられる。

- (8) ai, jarkufi afo:ssa:.
おや、戸が 開いているね。
- (9) e, gumi firakajo:ssa:, majaga mata ?ma:mari fjo:ssa.
あ、ゴミが 散らかっているね。猫が また ここまで 来ているね。
- (10) ane magi:nu ifiga dzi:ke: uttijon.
あれ、大きな 岩が 地面に 落ちている。
- (11) jarkufi akijon.
戸を 開けてある。
- (12) anma:ga futon ha:rakahon.
お母さんが 布団を 干してある。

- (13) su:ga gomi fittijo:N.
お父さんが ゴミを 捨ててある。

〈開始限界後の段階〉をあらわす次の例はすべて「シリアルキオル（している）」相当形式への置き換えが可能である。さらに、調査時にこのような例をたずねると、話者は、はじめに「シリアルキオル」形式で回答する。このため、伊平屋方言では、かつては、シオルとシリアルキオルによる完成相と継続相の二項対立型アスペクトをなしていたが、シリアルキオル相当形式が新しく生じた結果、〈開始限界後の段階〉をシリアルキオル相当形式が担うようになっていると考える。

- (14) ane nʃendi su:ga saki nuno:NRO:.
ほら、見て、お父さんが 酒を 飲んでいるよ。

- (15) ane, ami ɸujo:ssa.
おや、雨が 降っている。[窓を開けて]

- (16) ja:ke: ke:ro: taro:ga jarakuʃi akijo:nu hadziro:.
家に 帰ると、太郎が 戸を 開けているだろう。[太郎が窓を開けている（窓が開きつつある）のを想像]

他の沖縄島内の方言とは異なる、伊平屋方言のもうひとつ特筆すべきことに、シテアル相当形式がないという点があげられる。〈痕跡〉や〈パーフェクト〉は、シリアルキオル（あるいは、シリアルキオッタ）相当形式が表現する。

- (17) ta:gara saki nuno:ssa:.
誰かが 酒を 飲んでいるね。[部屋のおいがかさいのに気づいて]

- (18) dʒi: ʃittae:, uriʒa mata ju:bi ami ɸujo:ssaja:.
地面が 濡れて、これは また 昨夜 雨が 降っているね。

- (19) taro:ga jarakuʃi akijo:mahe:.
太郎が 戸を 開けてあったんじゃないか。[太郎が戸を開けてしまっていた（戸は開いていた）のを思い出して]

テンス的に対立しているシリアルキオッタ相当形式は、実現の直前までいったが、実現しなかったことをあらわす〈未遂〉というモーダルな意味を表すことができる。シリアルキオッタ相当形式におきかえることもできる。

- (20) an tukije wanja na: iʃigwa:ne: sukuno:tassa:.
あの時、私は もう 少しで 死ぬところだった。

- (21) midʒitu maʃigae: na: iʃigwa:ne: saki nuno:tassa:.
水と まちがえて、もう 少しで お酒を 飲むところだった。

また、文法的なアスペクトには含まれないが、時間的展開を表現する形式としての語彙的なアスペクト形式をいくつかあげておく。

(1) スルト シオル形式

	非過去形	第二過去形
完成相の形式	akinte ϕ un (開けようとする)	akinte ϕ utan (開けようとした)
継続相の形式	akinte hon (開けようとしている)	akinte hotan (開けようとしていた)

(2) スルト シアリ アルキオル形式

	非過去形	第二過去形
	akinte he: attsun (開けようとしている)	akinte he: attsu:tan (開けようとしていた)

(3) シガタ ナリアリオル形式

	非過去形	第二過去形
	akigata najon (開けそう)	akigata najo:tan (開けそうだった)

(1) スルト シオル形式

内的限界動詞

(22) magihe:nu iſiga nagari hadzimitan. gakikara utinte ϕ undo:.
大きな 石が 転がり 始めたよ! 崖から 落ちようと している!

(23) jarkuſiga atunte: ϕ un.
戸が 開こうと している。(早く 閉めないと) [風が強いので、戸がガタガタ動いているので]

(24) ane ahangwa:ga anu gakinu subane ue: utinte hondo:.
ほら、赤ちゃんが あの 崖の 近くに いて、落ちようと しているよ。

非内的限界動詞

(25) ane: su:ga saki nununte ϕ un.
あ、お父さんが 酒を 飲もうと している。[お父さんが酒をテーブルの上に置いているのを見て]

(2) スルト シアリ アルキオル形式

内的限界動詞

(26) taro:ga jarkuſi akinte he: attsun.
太郎が 戸を 開けようと している。[戸に近づいているのを見て]

非内的限界動詞

(27) ane: su:ga saki nununte he: attsu:n.
あ、お父さんが 酒を 飲もうと している。[目撃している場合]

無意志動詞の場合、違和感がある文になる。

(28) ?? attangwa:ne: dzo: makkuru: nae: hadži hidzuruku nae:, ami nama ϕuinte he: attfun.

急に 外が 暗く なって、 風が 冷たく なって、 雨が 今にも 降ろうと している。

(29) ?? anu gakinu i:nu ifi nʃenri. garagara e: nama sugu utinte he: attfun.

あの 崖の 上の 石を 見て! ぐらぐら して、今にも 落ちようとして いる。

(3) シガタ ナリアリオル形式

内的限界動詞

(30) taro:ga jarakuʃi akigata najo:tafiqa akantassa:.

太郎が 戸を 開けそうに なっていたが、 開かなかったよ。

非内的限界動詞

(31) attangwa:ne: dzo: makkuru: nae: hadži hidzuruku nae:, ami nama ϕuigata: najon.

急に 外が 暗く なって、 風が 冷たく なって、 雨が 今にも 降ろうとし ている。

(32) anehja tanme:ga sakigami akie: saki ʃidze: nama sugu

ほら、おじいちゃんがサケガメを 開けて、酒を ついで、 今にも

saki numigata najon.

お酒を 飲もうと しているよ!

また、動作や変化の開始限界の兆候をとらえる形式-gisan (過去形は-gi:satan) がみられた。

内的限界動詞

(33) jarakuʃiga atʃiqi:samahe:

戸が 開きそうじゃないか。

(34) ro:sokuno hi:ga na:jagati ʃaigi:sa.

ろうそくの 火が もうすぐ 消えそうだ。

(35) anu gakinu i:nu ifi nʃenri. garagara he: nama sugu utiqi:saro:

あの 崖の 上の 岩を 見て! ぐらぐら して、今にも 落ちそうだよ。

非内的限界動詞

(36) hadžiga tsu:hanu hatakinu hi:ga uʃie: jamaga me:gi:satan.

風が 強いから 畑の 火が うつつて 山が 燃えそうだった。

3. 2 ヴォイス

受動動詞の形式は、基本語幹に接辞-ari:N あるいは-rari:N を後接させて作る。能動文との対応関係、つまり能動文のどの要素が主語になるかという観点からタイプ化すると、直接対象主語の受動文、あい手対象主語の受動文、所有者主語の受動文、間接受動文に大別す

ることができる。伊平屋方言の特徴として、あい手対象主語の受動文は確認することができなかったが、そのほかすべてのタイプの受動文の例がみられた。また、自動詞を受動動詞の形式にして用いることも可能ということである。ただし、他の沖縄島内の方言では、所有者主語の受動文、間接受動文は作れない地点が多く、今回調査した話者の方が比較的若い方だったことや、日本語を方言に訳していただく形で用例をえた方法上の問題点をふまえると、確認する必要があるかと思われる。また、使役文の用例は得ることができなかった。

直接対象主語の受動文

- (37) bappe:e: matʃigae: gadzimarʉ tʃi:e: tanme:ne mugeraritan.
間違えて、ガジュマルを 切って、(祖父に) 怒られた。
- (38) tara:ja denwane ukuharitan.
区長は 電話に 起こされた。
- (39) niʃiru:ja tara:ne naqiraritan.
泥棒は 太郎に 投げられた。

もの主語の受動文

- (40) ʃuroʃikine tʃitʃimarijo:tanu taru:nu dzinja bu:ru niʃimaritan.
風呂敷に 包まれていた 太郎の お金は すべて 盗まれた。
- (41) tʃina ʃitsunu me:nu hi:ne tʃinaga ta:gara:ne: tʃi:rarijo:tan.
綱引きの 前日に 綱が 誰かに 切られていた。(結果継続)
- (42) tʃinaja ha:munne rippangwa:ne tʃi:rarijo:tan.
綱は 刃物で きれいに 切られていた。(結果継続)

所有者主語の受動文

- (43) niʃiru:ja taru: sugunte hitʃaʃiga tara:ne kenna: katʃimiraritan.
泥棒は 太郎を なぐろうとしたが、太郎に 腕を つかまれた。

間接受動文

- (44) hanakoja warabine nakaritan. / warabine ʃunde: harie:jo:.
花子は 赤ちゃんに 泣かれた。
- (45) tara:ja amine ʃu:rarie kumatan.
太郎は 雨に 降られて、困った。

また、動作主体が人ではなく、外的作用（ここでは、風や大雨）による影響である受動文の例もみられた。この場合も、直接補語は ne 格であらわされる。

- (46) tara:ga ja:nu ka:raja hadzine tubaharitan.
太郎さんの 家の 屋根は 風に とばされた。
- (47) u:ami/magiami ʃue: haʃinu nagaharitan.
大雨が 降って、 橋が 流された。

3. 3 やりもらい

やりもらいの形式は、第三中止形に補助動詞 *туруфун* を組み合わせた分析的な形式が用いられる。授受動詞には *kwi:n* (くれる)、*i:n* (もらう) があるが、これまでにこれらが用いられている例は確認できていない。

(48) *su:ga u:mike n:dʒe: turuʃan.*
父が 海に 行って くれた。

(49) *odʒi:ga manna tʃi:e: turuʃan.*
おじさんが 一緒に 切って くれた。

依頼表現

やりもらいの形式は、述語が命令形になると、依頼表現の文になって、相手に動作の実行をたのむ・お願いするというモーダルな意味を表現する。得られた用例では、命令形や勧誘形、あるいは「～してくれない？」に相当する形式など複数の形式であらわれている。命令文や勧誘文との関連とそれぞれを使い分ける条件を調査する必要がある。

(50) *ittutʃi tungwane ujo:kiro: / uenri / ʔjo:tʃe turuhen. / ʔjo:tʃituruhendija.*
しばらく 台所に いて ください。

(51) *ʃi:dʒa: kundun mi: utuʃi:ro: / utuhe: turuhi:ro: / ʔturuhi:.*
兄さん、今年も 実を 落として くれ。

(52) *du:kara / ʔja:kara / ugakara satʃine: uriranahe: / urie: turahani.*
君から さきに 降りて くれ。

(53) *uttu:ken nisenen turuhendi / turuhe: turuhando:.*
弟にも 2000 円を あげて / くれて くれ。

(54) *unu ju: jaʃiku u:e: turuhendi. / turaha:ni.*
その 魚を 安く 売って ください。

(55) *wanga kawaine unu saki nunenri. / nune: turuhenri. / umanahe:. / nuno: (のもう) . / nune: turahani (すすめる) .*
私の かわりに この酒を のんで ちょうだい。

(56) *ʔja:n ʃuendi / ʃue: turuhe:.*
お前も 掘って くれ。

3. 4 可能表現

内的に条件づけられた可能

イーブン可能形

(57) *watta: warabi:ja ʃiman ho:gen dikiindo: / naindo: / i:ʃunro:.*
うちの 子は 伊平屋方言を 話せるよ。

(58) *tara:ja je:goja abihanro:.* (太郎は英語は話せないよ。)

(59) *wanja arerugi: jatujo, saki nununu kutuja naranro: / saki numihanro:.*
私はアレルギーだから、酒を飲むことができないの。

ナイン可能形

- (60) wanja arerugi: jatujo, saki nununu kutuja naranro: / saki numihanro:.
私はアレルギーだから、酒を飲むことができないの。
- (61) watta: warabi:ja ſiman ho:gen dikiindo: / naindo: / i:φunro:.
うちの 子は 伊平屋方言を 話せるよ。

外的に条件づけられた可能

サリーン可能形

- (62) tſu:ja ſigutu he:ku uwatatu φu:rarintero:.
今日は 仕事が 早く 終わったから、来れるってよ。
- (63) tſu:ja harijo:ta:tu, u:mine e:garitan. (今日は晴れていたから、海で泳げた。)
- (64) A : ?ja:ga saki numantan midzirahapi. (お前が飲まなかったの? 珍しいな。)
B : namakara uttu so:nga inganko: narantu, jattu numarantanba:jo:.
今から弟を迎えにいかないといけないんだよ。だから飲めなかったんだよ。
- (65) nitſi ndzie: tſu: hittſi: nu:N kanunu kutu narantassa: / nu:N kamarantassa:.
熱が出て、一日何も食べることができなかったよ。

ナイン可能形

- (66) nitſi ndzie: tſu: hittſi: nu:N kanunu kutu narantassa: / nu:N kamarantassa:.
熱が出て、一日何も食べることができなかったよ。

社会的に条件づけられた可能（規範的な可能）の例もみられた。

- (67) wanja hatatſi natatu, kisa saki numarinro: / saki nununu kutu nain.
私は一昨日、20歳になったから、もう、お酒を飲むことができるよ。

必然表現

- (68) urja: bu:ru namanko: narante ſinſi:ga ?ju:tamahe: / ?ju:tahapi?
これは 全部 飲まないと いけないって 先生が 言ってたろ。

3. 5 たずね

疑問詞質問形

疑問詞質問文の述語は、非過去形の場合、-ru を後接させた形式があらわれる。過去形の場合は、動詞の語末の N を脱落させた形式（尾略形）の語末の母音を長母音にした形式、尾略形に-ga を後接させた形式がみられた。

〈非過去形〉

- (69) nu:nte ſittajoru. (なぜ 濡れているの?)
- (70) A : ane, nu:ga numanru: midzirahamahe: なんでのまないの? 珍しいんじゃないか。
B : tſu:ja kuruma mutſe tfo:tu numaran. 今日車をもってきているから飲めない。

- (71) A : nu:ga nune: ne:nru? (なんで (薬を) 飲んでいないの?)
 B : kisa no:ta:tu, numanten Jimuhaji. (もう治ったから、飲まなくてもいいでしょ。)
 A : urja: bu:ru namanko:, narante jinfi:ga ?ju:tamahe: / ?ju:tahaji?
 これは 全部 飲まないと いけないって 先生が 言ってたどろ。

〈過去形〉

- (72) A : kinnuja ta:tu afina:. (昨日は誰と遊んだの?)
 B : tara:tu afinan. (太郎と遊んだよ。)
 (73) A : ?ja:ja namamadi nankai to:kjo:ke: n:dzaqa:.
 お前は 今まで 何回 東京に 行ったの?
 B : wanja namamadine sankwai n:dzo:ndo:.
 私は 今までに 三回 行っているよ。

肯否質問形

肯否質問文の述語の動詞は、非過去形の場合、尾略形に-mi を後接させた形式、-ruri を後接させた形式がみられた。過去形の場合、-ti: (あるいは、-pi:) を後接させた形式、また、否定の形式のみ、-ruti: を後接させた形式がみられた。それぞれの形式を述語にもつ文の違いは不明である。

〈非過去形〉

- (74) A : tfu:ja nunumi?. (今日は飲むの?)
 B : wanja ku:ja numanro:. (俺は今日は飲まないよ)
 (75) A : bu:ru kisa fikake:ruri:? (みんなもう飲んでいるの? (しかけてるの?))
 B : n:n: na:da nune: ne:ndo: / fikake: ne:nro:. (いや、まだ飲んでいないよ。)
 (76) hanakojja numanruri? / numapi? (花子は飲まないの?)

〈過去形〉

- (77) anu mise kisa afoti:.
 あの 店、 さっき 開いていた?
 (78) A : kisa jarakufi akiti:.
 もう 戸を 開けた?
 B : ?N: taro:ga akitando:.
 うん、 太郎が 開けたよ。[目撃した場合]
 (79) A : gakkone:ru afini:. (学校で遊んだの?)
 B : ananro: tara:nu ja:ne: afinanro:.
 ちがうよ。太郎の 家で 遊んだよ。
 (80) ?ja: uiru fu:ti:.
 お前、 いたのか?
 (81) A : kisa kusui nuni:. (さっき 薬を 飲んだか?)
 B : in: kisa nunando:. (うん、 さっき 飲んだ。)
 (82) kusuija nunihe: / numanba:i. (薬は飲んだの?)

- (83) ?ja:ja unu kusui nune: ne:NRuri? (お前はこの薬を飲んでいないの?)
 (84) ?ja:ja anu tutʃi nu:N kamanruti:? (食べないの?) / kanene:NRuti:? (食べていなかったの?)
 あなた、あのとき、何も食べていなかったの?

うたがいたずね形

聞き手へのはたらきかけ性が低い形式である。否定形式の場合は、-ruki: (-ruka:) を、肯定形式の場合は-ka:を後接させている例を得ることができた。

- (85) bento:ga ti:tʃi nukuinro: ta:gara kamanruki:?
 お弁当が一つだけ残っているよ。誰かしら食べなかったの?
 (86) taro:ja nama: nuno:ka. / nune: attsu:ka:? (太郎はまだ飲んでいるのかな?)
 (87) tara:ja kusui buru numanruta:ka? (太郎は薬を全部飲まなかったのかな?)
 (88) tara:ja sakija nune: ne:NRutaka. (太郎はお酒は飲んでいなかったのかな?)

3. 6 はたらきかけ

命令形

命令形を述語に用いる命令文の他に、第三中止形に動詞「見る」の命令形 nri を組み合わせた分析的な形式、また、-kanahe: (している) のような接辞を後接させた形式がみられた。

- (89) sugu jarakuʃi akire:.
 すぐ 戸を 開ける。
 (90) tamanija ?ja:N araendi arare:hja:.
 (弟に)「たまには お前も (皿を) あらえよ」
 (91) gu:gu ja:N gutu he:kuna: miruku nume:.
 いやいや いわないで 早く 牛乳を 飲め。
 (92) aʃibangutu ʃigutu he:.
 休んでないで 仕事を しろ。
 (93) tenki najotu dzo:ne: aʃine: ʃa:.
 天気は いいから、 外で 遊んで 来い。
 (94) ?jan ittutʃi tʃi:e nri.
 おまえも ちょっと 着て みろ。
 (95) ?ma:ke tʃe nri. (こっちへ 来て みろ。)
 (96) tʃu:ja du:tʃine nu:re: / nu:enranahe: / nu:e nri.
 今日は 一人で 寝て みろ。
 (97) mu:ru akijo:kanahe:.
 (戸を) 全部 開け終わっている。 [会場に行った時には窓を開け終わっているよう
 命じて]
 (98) ukuritujo:, satʃine: nuno:kanahe: / ʃikakiranahe:.
 遅くなりそうだから、先に飲んでいろよ。

勧誘形

勧誘文の述語は、これまで「～しないか」というような肯否質問形の否定形であらわれている。最後の例は聞き手に動作の実行をうながしており、もはや命令文に近い。

- (99) basu urie: attfe: ka:ra:ni.
バスを 降りて、 歩いて 帰らないか。
- (100) nimutʃi dzo:ke ndzahe: ja:n naha katadzikirani.
荷物を 外に 出して、家の 中を 片づけないか。
- (101) bu:rune: ʃu:ni: ʃu:dze ndani.
みんなで 舟を 漕いで みないか。
- (102) bu:rune: ʃu:ni: ʃu:qani.
みんなで 舟を 漕がないか。
- (103) kamanahe:. 食べないか。

禁止形

禁止形は語尾に-jo のついた形式があらわれる。また、否定形に-ki、あるいは-ke を後接させて「～せずにおけ（～せずにいる）」のようにあらわす文のほうが多くみられた。

- (104) jatten ʔja:ja kamidzu:hatu na: kamanke: / kamunajo: / kane: naranro:.
でもお前は食べすぎだから、もう 食べるな。
- (105) abunahattu, waraba:ja ʃunke:.
危ないから、子供は 来ないでおけ。
- (106) na: iʃigwa: ho:, wa:ga tsu:numari numankiro:.
もうすぐ来るから、俺が来るまで 飲まないでおけよ。
- (107) na: kamanke:ro: / kamanke:ro: / ju:kure: tara:nu bunga ne:n naiʃiga.
もう 食べないでおけよ。太郎の分がなくなるよ。

3. 7 中止形（連用形）

中止形は、動詞が述語になっても文が続く場合に使われる形である。中止形には、第一中止形と、第一中止形に助辞=te がついた形の第二中止形、そして、第一中止形に存在動詞「アリ」（有り）が接続した形の第三中止形がある。また、いいおわりの形（終止形）にみられるテンス・ムードの対立はない。首里方言や北部方言において、第一中止形が単独で使われることはほとんどなく、名詞づくりや複合動詞、派生形容詞などの単語づくりの要素として用いられているようであることから、伊平屋方言でも同様と考える。第二中止形は伊平屋方言にはなく、第三中止形が積極的に用いられている。第三中止形は、単語づくりの要素にもなるが、単独で文の中にあらわれて2つの動作の時間的な関係（先行、同時）もあらわす。また、修飾語としてはたらくこともある。

- (108) wanga arae: su:ga katadzikitan.
僕が 洗って、お父さんが 片づけた。
- (109) u:mike n:dze: ʔe:dze: ʃan.
海に 行って、泳いで 来た。

(110) sa: kuntʃe: kagoke: iritan.

足を 縛って、籠に 入れた。

中止形と同じ動詞を述語に用いて、動作や存在を対比的に示す例がみられた。

(111) hiqaʃineja gamaga ae: niʃineja hakaga an.

東には 洞窟が あって、西には お墓が ある。

(112) wanja makkara jo:ʃuku tʃi:e: imo:toja o:ru jo:ʃuku tʃi:tan.

私は 赤い 服を 着て、妹は 青い 服を 着た。

修飾語としてはたらき、第二の動きの側面（具体的なあらわれ、ようす、方法）を説明する例。

(113) arija i:e: nu:jon.

彼は 酔って 寝ている。

(114) tara:ja wadzine: niʃiru: ʔwa:gitan.

太郎は 怒って 泥棒を 追いかけた。

(115) hadʒinu ʃutʃe: nankuru u(t)titan.

風が 吹いて 自然に 落ちた。

(116) habun sukune: ka:bike: nukujo:tan.

ヘビも 死んで 皮だけ 残っていた。

(117) bu:ru ke:e: namaja tarun uran.

みんな かえって 今は だれも いない。

3. 8 条件形

条件形は、あわせ文のなかの条件的なつきそい文の述語としてもちいられる動詞のかたちである。条件的なつきそい文は、いいおわる文のあらわすことがらなりたつための条件をあらわしている。伊平屋方言の条件形は、おおきく、原因・理由、条件、契機などのまさめの関係をあらわす形式と、うらめ原因やゆずり状況などのうらめの関係をあらわす形式とに分かれる。

-tu 条件形

-tu 条件形は、原因・理由、契機をつきそい文にさしだすときに用いられる。意味・機能的には、現代日本語のノデ条件形、カラ条件形に対応する。現代日本語の場合には、「するので」のかたちがせまい意味での原因をあらわし、「するから」のかたちが理由をいいあらわすというちがいがあがるが、伊平屋方言のばあいにはそれらを区別してあらわす形式は分化していないようである。

(118) anma:ja mun tsukuitu araran.

お母さんは 料理を 作るから、洗わない。

(119) taro:ga kadze hiʃatu saikinja dʒiro:garu jarkuʃi akie: attsun.

太郎が 風邪を ひいたので 最近 は 次郎が 戸を 開けている。

- (120) uma:ne kwa:finu aita:tu wa:ga kanan.
 そこに お菓子が あったから 私が 食べた。
- (121) he:ti ?ja:ritatu figutu fitjan.
 しなさいと 言われたから、仕事を した。

また、つきそい文に実際におこったリアルな出来事がさしだされ、いいおわり文にそれによって引き起こされる出来事が描かれる契機的なつきそいあわせ文にも-tu条件形が用いられる。

- (122) ki:sa miŋi atfo:ta:tu, amiga usumasa ŋue:jo:, urine indajo:n.
 さっき 道を 歩いていたら、雨がはげしくふってね、それでびしょぬれだ。
- (123) ja:ke ke:ta:tu ŋakuga uitan.
 家に 帰ったら、お客さんが いた。

伊平屋方言は、他の多くの北琉球諸語と同様に連用形の否定の形式をもたないが、かわりに-tu条件形の否定の形を用いる。この場合、条件づけ・条件づけられの関係をもっているとはみなせない。述語動作の側面をあらわしているとみなしてよいのかもしれない。

- (124) su:ja figutu sangutu me:nafi ja:ne: un.
 父は 仕事をしないで 毎日 家に いる。
- (125) ta:ken ŋikangutu fittie: ne:n.
 誰にも 聞かないで 捨てて しまった。
- (126) aŋibangutu figutu he:.
遊ばないで 仕事を しろ。

-o:条件形

一般的な出来事、繰り返しの出来事を表現する場合にこの条件形があらわれやすかった。いいおわり文にはものがたり文があらわれる。

- (127) arija su:ke ?ja:riro nu:tanten ŋun.
 彼は お父さんに 言われたら、何でも する。
- (128) ju: ki:ro: tarun aŋiban.
暗く なったら、誰も 遊ばない。
- (129) uttu:ja nu:no: sugu: i:n.
 弟は 飲んだら、すぐに 酔う。
- (130) uno:, ki:nu mi:ja nankuru utin.
熟したら、木の 実は 自然に 落ちる。
- (131) arija ?ja:nko:, nu:n han.
 彼は 言われなければ、何も しない。

未来における出来事を仮定、あるいは想定して、その実現を条件としてつきそい文にさしだすとき、この条件形が用いられることがあった。いいおわりの文にはおしはかりの

文があらわれている。

(132) ja:ke: ke:ro: taro:ga jarakuŋi akie: attsunu hađziro:.

家に 帰ったら、太郎が 戸を 開けて いるだろう。[太郎が窓を開けている（窓が開きつつある）のを想像]

(133) dzira:ga undero:, madzUN nuno: hađziro:. / nune: attsun hađziro:./ dzira:ga madzUNjare:.,
nama manna nuno:N hađziro:.

次郎がいるなら、まだ一緒に飲んでいるはずよ。

-figa 条件形

figa 条件形は、うらめ原因的な関係をあらわすつきそい文の述語になる。現在や過去の事実的なうらめ原因的な関係をあらわし、つきそい文にもいいおわり文にもリアルなできごとが表現される。

(134) iŋin taro:ga aki:figa ŋunage:naja dziro:garu jarakuŋi aki:ssa.

いつも 太郎が 開けるが 時々は 次郎が 戸を 開けるよ。

(135) su:ja ŋui:figa anma:ja ŋuran.

お父さんは 掘るけど、お母さんは 掘らない。

(136) wanja nu:tatu, wandzu: wakaranhiga, ŋinnu magiami ŋu:ti.

私は寝ていたから、私はわからないけど、昨日、大雨がふった？

(137) nama: ŋikarari:figa ŋittitan.

まだ 使えるが、捨てた。

-N 条件形

N 条件形は、ゆずり状況的な関係をあらわすつきそい文の述語になる。つきそい文にさしだされる出来事は、話し手にとっては仮定や前提である。繰り返しの、一般的な場合にも用いられるようである。

(138) ki: ŋu:dze:N,o:ru mi:ja u(t)tiran.

木を 揺らしても、青い 実は 落ちない。

(139) ŋi:dzaja ŋassa nunen i:ran.

兄は どんなに 飲んでも 酔わない。

参考文献

- ・上村幸雄（1963）「首里方言の文法」『沖縄語辞典』国立国語研究所編
- ・奥田靖雄（1992）「動詞論」北京外国語学院講義プリント（『奥田靖雄著作集(3)言語学編(2)』（2015）むぎ書房所収）
- ・奥田靖雄（1993、1994）「動詞の終止形」『教育国語』2-9、2-12、2-13（『奥田靖雄著作集(3)言語学編(2)』（2015）むぎ書房所収）
- ・かりまたしげひさ（2010）「琉球語安慶名方言の動詞の形づくり」『琉球の方言』34号
- ・かりまたしげひさ（2016）「琉球諸語のアスペクト・テンス体系を構成する形式」『琉球諸語と古代日本語—日琉祖語の再建にむけて』くろしお出版
- ・崎原正志（2018）琉球語沖縄首里方言のモード・モダリティ—モード・モダリティ調査票作成のため

- にー（覚書）沖縄言語センター月例研究発表会 2018 年 4 月 7 日配布資料
- ・ 崎山拓真・上門梨緒（2017）「伊平屋島田名方言の動詞の活用」『文化庁委託事業報告書危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
 - ・ 鈴木重幸（1983a）「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72 号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
 - ・ 鈴木重幸（1983b）「動詞の形態論的な形の内部構造について」『横浜国大 国語研究』創刊号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
 - ・ 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
 - ・ 當山奈那（2017）「伊平屋島尻方言のアスペクト・テンス・モダリティ」『国際琉球沖縄論集』6
 - ・ 仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
 - ・ 名護市史編さん委員会（2006）『名護市史本編・10 言語』名護市役所
 - ・ 琉球方言研究クラブ（1988）「伊平屋の中止形：田名方言を中心に」『琉大方言』3
 - ・ 琉球方言研究クラブ（1989）「伊平屋方言の第三中止形」『琉大方言』4
 - ・ 国立国語研究所（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局